
エーミールの想い

ウツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エーミールの想い

【Nコード】

N8847E

【作者名】

ウツキ

【あらすじ】

ヘッセ作『少年の日の思い出』の二次創作。ポイズラブ。エーミールの視点からの物語。（引用の台詞は高橋健二訳より）

（前書き）

ボーイズラブ小説に嫌悪を抱く方、ヘッセのファンの方は、ご不快な思いを持たれるかも知れません。自己責任で読まれることをお願い致します。

森の中にあるコテージの傍らの木の側で、僕とエーミールは親しく語り合っていた。エーミールは同じ大学に学ぶ友人であり恋人だ。僕の冗談に軽く怒りながら、ふざけて小突こうとしたエーミールの手を避けて、僕は幹にぶつかった。耳元を掠めてひらりと大きな蝶が舞い上がる。驚く僕にクジャクヤママユだとエーミールが言う。大きな斑点を美しく光らせながら蝶は優雅に僕らの頭上を舞う。羽ばたく蝶の軌跡を見送りながら独り言のようにエーミールは呟いた。あの蝶を見ると思い出す。もうそいつの名前も覚えていないけれど。己の性癖を始めて自覚するに至った、そう……僕の初恋……。

「初恋？」

エーミールはこちらを向いて、しまったというような顔をした。

僕は重ねて聞いた。

「ねえ、話してよ、君の初恋の話を」

「聞きたければ聞くがいい。馬鹿な子供の愚かな話だ」

想い出の軌跡を追うようにエーミールは蝶の消えた梢を見上げながら、僕に少年の日の思い出を語った。

子供の頃、僕は同年齢の少年たちを醒めた目で眺めていた。賑やかで騒々しい喧嘩、犬っころのようなじゃれあい。太陽の下で戯れる同級生達の眩しい交友。それよりも僕は、夜更けの書斎、ランプの下で語られる文学談義や政治談議など、父とその友人達の落ち着いた交流を好ましいと思っていた。けれどむろんその中に入れてもらえない程大人じゃない僕は、子供からも大人からも外れた処で彼らを眺めていた。そしてそれを淋しいとも思わぬほどに醒めていた。そう僕は特に何かに執着することはなかった。そのころ興味を持っていた蝶集めさえ、僕をそれほど夢中にさせてはいなかった。

けれど隣の家の少年は違った。それに無邪気に熱中していた。珍しい蝶を捕まえたら嬉しそうに友達に見せ、相手の持っている珍しい蝶を目を輝かせて見つめる。

僕は半ば呆れ半分、嘲り半分でその様子を見ていた。そして彼のその少年らしい健やかさに次第に惹かれていくことに、その頃はまだ気づいていなかった。関心があるのはただ隣に住んでるから。それだけだと思っていた。

ある日、彼は自分が捕まえたコムラサキを僕に見せに来た。

「うん、これは中々珍しいぜ。二十ペニヒぐらいの価値はあるんじゃないかな」

僕の言葉に彼は誇らしそうに顔を輝かせた。生き生きとした素直な反応。僕はそんな彼に思わず見惚れてしまった。

「どうかした？」

の彼の言葉に我に返る。そして僕は動揺した。

「だけどこんな展翅の仕方をしちゃあ台無しだ。それに右の触覚が曲がってるし……」

何故だか急に目の前の彼が憎らしく思えた僕は、彼の蝶に難癖をつけた。彼の傷ついた顔に僕の心は密かな喜びを覚えた。けれど彼が帰った後で僕は気の抜けた空しさを感じた。

今ならその理由が分かる。僕は無意識に彼に惹かれる自分を自覚して焦り、そのことに露とも気づかない彼を憎んだのだ。彼の健やかな少年らしさに対する羨ましさ、妬ましさ、愛しい故に傷つける喜び、その時はそんな複雑な感情に気づいていなかった。

それから二年。僕は蝶を捕まえることより育てることに関心が移っていた。注意深く世話をして、さなぎから孵らせ、そして最後には標本箱の中に展翅する。神のように命を手の中で遊ばせているような気分を愉しんでいた。

ある日、そんな風にして育てたクジャクヤママユが標本箱の中で

ばらばらになっていた。

慈しんだ人間が悪魔に踏みにじられた姿を見る神のような気分で、僕が空しく翅を繋ぎ合わせていると隣の家のあいつが現れた。

「ごめん、それ、僕が……」

彼は続けて詳しく説明しようとした。けれど聞かなくても僕には判った。彼はこの蝶を見てどうしても欲しくなり盗んだ。けれど良心が咎め、元に戻そうとした時、ポケットに押し込んだ蝶の翅はばらばらになっていたのだ。そして誰かに言われたか自分の意思でか己の行いを謝りに来たのだ。なんとも実に真つ当な少年らしい行動じゃないか。僕は太陽に愛される少年を汚したくなった。

「そうか、そうか、つまり君はそんなやつなんだな」

僕は彼を冷淡な軽蔑的な目で見つめた。そして僕の口は壊れたように更に侮蔑的な言葉を吐いた。

それほど親密でもない僕の、部屋に勝手に上がりこんだのは、それほどまでに蝶が見たかったから。彼の目的は蝶で、僕ではない。真つ当な少年の彼は、僕のことを嫌味な奴だと嫌っていたのだから。僕の彼への関心を読まれるのは嫌なくせに、僕の気持ちに気づかない彼を憎らしく思った。僕は滑稽なことに蝶に嫉妬していたのだ。だから彼の蝶への気持ちをも、否定するような言葉で、貶めた。

彼を優しく許すことが僕と彼との距離を縮めるきっかけになったかもしれない。けれどその時ははつきりとそんな自分の感情に気がついていなかった。ただ理由のわからない傷つけられたという想いに苛立ち……。

だから傷つけ返した。

彼の眼に怒りが燃え上がる。僕は彼が僕に飛びかかればいいと思った。殴りつければいい。けれど彼は自分を抑え、静かに出て行った。

ドアの閉まるパタンという音を聞いて僕は、彼をどうしようもなく傷つけたことを知る。そして僕は、形になっていなかった恋心を始めて自覚して、今の瞬間、自分でそれを永久に叶わなくしてしま

ったことに気がついた。

ばらばらになったクジャクヤママユ。取り返しのつかない失態。許すとただ一言、言ってやればよかったのだ。僕は展翅台の上の罪の元凶を摘み上げる。今からでも遅くない？ 彼のように今度は僕が……。

けれど僕の性格として、そんなことは出来るわけがなかった。

翅の欠片は握り締めた手の中ですっかり粉々になっていた。それから間もなく僕は家を離れジムナジウムに入った。

「昔からプライドが高くて素直じゃなかったんだね」

僕はエーミールを冷やかす。

「ふん、君も言うようになったな」

無然としたエーミールに僕は笑いかけてキスをした。

「あ……」

「どうしたの？」

「思い出したんだ、あいつの名前を、まあ、もう、どうでもいいことだけど」

そういつて今度は彼の方から口付けてきた。それはまるで傷つけたことに対する償いのような優しいキスだった。彼の言葉通り彼の中で彼の初恋はもう過去のものになっているのだろうか、本当は、痛みを伴った思い出としてこれからもいつまでも心に残り続けているのではないだろうか。

相手の少年の方はどうなんだろう。そんなことなど、もうとつくの昔に忘れてしまっているのか。それとも悔しさと共に今も鮮やかに覚えているのだろうか。その時僕は愚かにも、エーミールとの想い出を共有する彼のことを少しだけ羨ましいと思った。

Ende

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8847e/>

エーメールの想い

2010年10月8日15時37分発行